

## 【COP10 記念シンポジウム】

### いのちの星で生き続けるためにー市民が考える COP10ー

2010年6月5日（土）13:30～16:00  
名古屋キャンパス白鳥学舎翼館クラインホール  
【参加者 214名】

#### 【小嶋学長挨拶】

今日はまもなく隣の名古屋国際会議場で開催される、第10回生物多様性条約締約国会議、COP10についてお話しいたします。

本学は、環境問題、地球温暖化問題に積極的に取り組んでおり、校舎屋上には太陽光パネルを設置、また近隣の幼稚園児と一緒にアサガオを植えて緑のカーテンを作ろうという取り組みもしています。本学は「敬神愛人」という建学の精神をどのように具体化しているかと色々と考えております。

本学は、COP10の展示会場となっております。白鳥地区もCOP10の展示会場となっております。全員でCOP10を考えるということになっております。環境問題、また絶滅危惧種が話題になっていますが、昔はたくさんいたメダカですら現在は絶滅危惧種となっております。先日は瀬戸キャンパスに鹿が迷い込みました。なぜ人里に下りてきたのか、我々人類が彼らの生活圏を奪ってしまったのか。一朝一夕で解決する問題ではありませんが、みんな考えていかなければ、今回のテーマでありますいのちの星で生き続けるというのはとても難しいのではないかと。本日は、この大きな課題について議論していただきます。それを聞いていただいて周りの方と一緒に考えようとしていただくと、このシンポジウムの意義が増すのではないかと思います。みなさんと共に考えて良い地球を作っていきたいと思っております。



#### 第1部：講演「いのちの星で生き続けるために」

【講師】 マリクリスティーヌ氏（COP10 広報アドバイザー）

COP10というのは、第10回生物多様性条約締約国会議ということですが、国連の環境計画の中で、COP10というのはまるで貧しい環境計画のいとこのように思われている。なぜ貧しいのか、それはなかなか予算がつかない生物多様性会議だから。それはなぜかというと、地球温暖化が主体になってその横にくっついて歩いているのが生物多様性だから。ですが、地球温暖化によって一番痛手を受けている生物が少なくなっているという事なの



で、本当は主体でなくてはいけないと思っている。生物多様性の重要性というのは、毎日の生活の中でなかなか直面しないものなので、全部繋がっているという意識がなかなか持てないことが、一般的に広がらない理由である。

生物多様性会議は政治的な問題でもあり、気候の問題でもあり、生物多様性という全てのものが絡んでいる。私たち

にとって病気になると治してくれる薬があると良いと思うが、私たちの体にとって薬になるようなものは生きている微生物となる。発展途上国において、そういう植物や土の中に入っている微生物や酵素などの資源が先進国などにより奪われてしまうことにより、不公平が生まれる。COP10のように国連会議の中でこれだけ多くの国々の方が集まる会議はほとんどない。国連加盟国以外の国の方がたくさん来る。そういう方々が会議で、自分たちの持っている権利を認めてもらえるよう、資源を持っていくならばきちんとした約束をして、私たちにも使えるような環境にしてほしいと訴えることができるという意味で、国連会議の中で重要な会議なのだ。

そこにある生物が生き延びるようにするには、地球温暖化の速度を止めないといけない。私たちが必要としている微生物などがなくならないようにするために、みんなでどのように地球を守っていけるか考えていくことが大きなテーマである。私たち一人ひとりにとって、生物多様性会議はほど遠いものというイメージであるかもしれないが、私たちにとっても大きく関わっている問題を議論したり交渉したりしてできた条約が非常に重要な決め事になってくる。そういった意味でもみんな注目することが大切だと思う。

アマゾンの中には多様な微生物、植物、生物があるが、一つの植物と一つの病気がマッチングする、という意味の『ONE SICKNESS, ONE PLANT』という言葉がある。昔から言われており、現代その効果に驚くこともある。

私たちは環境に対しても色々な知識を持たなければならないし、普段している行動はどれだけ人類に対しての影響力があるのか考えて行動しなければならない。責任ある行動とは、単なるごみの分別やオーガニックの物を食べるという事だけではなく、みんなで意識をすることが大切。みんなで倫理観を持って生活しなければいけない。全ては繋がっており、地球温暖化防止するだけで全てが解決されるのではない。人類が地球上に生活する上で私たちの生き方が問われているのではないかと思う。

概念を変えなければならない。共有していくことが大切。普段当たり前だと思っていることを少しずつ我慢していく。苦しい思いをするのではなく、度が過ぎていないか考えていくことが大切なのだ。生物多様性の一番大きな原点はバランス。捕り過ぎない、消えさせ過ぎない。恐竜は自然が与えてくれた速度の中で絶滅していった。人類が科学技術や、自分たちが持続していくため、また営利目的のため、精神的に満足するためだけに地球に

ダメージを与えるのではなく、バランスよく生活することが重要なのだ。生物多様性条約会議がそんなことを考えるひとつのきっかけになれば素晴らしいと思う。もっと自然にふれる機会のきっかけとなると良いと思う。生態系はひとつ外れると壊れてしまうチェーンのようにもろいものなので大切にしなければいけない。地球市民として、地球に負荷をかけないために、生活を見直したり、何ができるのか工夫して行動にかえていく。そしてみんなで美しい地球を守っていききたいと思う。

## 第2部：パネルディスカッション「生物多様性の保全と地球の未来」

【コーディネーター】木村光伸（本学リハビリテーション学部長）

【パネリスト】マリクリスティーン氏

加藤弘二氏（中日新聞社社会部記者）

稲垣隆司氏（前愛知県副知事・本学理事）

今村薫（本学経済学部教授）



木村：

私たちが命の星で生き続けるためにどうすればいいのか、いろんな角度から考えていきたい。私たち人間が地球の多様な環境の中で生きている、そして表面的には豊かであったり貧しかったりしても、基本的生き方はひとつではないかと思う。今日はいろんな形で生物多様性、文化の多様性をたどりながらどう生きていけばよいか話をしたいと思います。

加藤弘二氏：『熱帯雨林の叫び この連載を通じて』

生物多様性は難しく奥深くいろんな側面がある。その世界的に注目されている地域取材したいと思った。熱帯雨林は世界の陸地の15%くらいを占め、全生物種の半分くらいが生息している。その反面、熱帯雨林の破壊が進んでいる。それには私たちの生活が密接に

つながっているという事、この側面をわかりやすく伝えたいと思った。取材したボルネオは、世界で3番目に大きい島で、豊かな熱帯林、希少動物や未知の動物の宝庫である。しかし、近年パーム油の生産が盛んになり、原生林が伐採されプランテーションが増加している。そのため野生動物の生息地が分断され、人と動物の衝突が増加している。私たちが知らないうちに熱帯雨林の破壊の圧力に加担しながら生活している。一方でパーム油は欠かせない材料であり、彼らの生活を潤している。環境を守ることと、経済活動をどう両立するか考えさせられる。



**木村：**

私たちは日常生活で悪いことをしようと思っていない。環境に良いことをしたいと思っている。私たちの周りはきれいだが見えないところで何が起きているかわからない。見えてこないことに問題がある。生態的に良いことをしようと思うと経済的にうまくいかないことがある。

**今村薫：『多様な環境と文化の多様性』**

生物多様性というと、人間からの視点で生物の事だけ考えて、人間は破壊行動をしているので良くないといわれる。人間そのものも生物であり、環境を助ける働きをしながら環境によって人間の生活が成り立っているということを紹介したい。人間も動物の一種であり、地球上のあらゆる場所で生活をしている。それを可能にしたものとは、身近な環境（衣食住）を持ち歩くこと、自然環境に合わせて生業を変えること。あらゆる場所に住むことができるのは文化の力によるのだ。文化を成り立たせているのは自然。私たちは産業社会に生きているが、日本の文化では伝統的に色の名前やシンボルに植物が使われている。衣食住、薬など様々な形で自然が文化を支えている。近代社会は自然と切り離されているように感じるが、人間は地球の上に暮らしており、人間の文化、人間の可能性を引き出しているのが自然である。人間が自然を豊かにし、自然が人間の文化を育てている。人間が住み手を入れることによって、樹木の種類が豊かになり、動物が集まり、動物村を作る。人間は自然を豊かにする能力、行動をとっている。多様な環境、生物多様性は人間にとって必要なものだ。

**木村：**

国連人間環境会議、ストックホルム宣言において、人間が自然を豊かにし、自然が人間の文化を育むということが問題であった。『人は環境の創造物であると同時に環境の形成

者である』という重要なことばにも関わらず忘れられている。何となく人間は一方的に自然を守らねばならない存在であるかの様になっているが、その延長上に様々な問題がある。エコノミーとエコロジーの関係はどうすべきか、真剣に考えていかなければいけない。

#### 稲垣隆司氏：『環境先進国あいちの取組』

ただ自然を守ろうというだけでは大きな間違い。身の回りの取組が生物多様性の保全となる。この地域での大きな問題は、①自動車排ガスに起因する大気汚染（NO<sub>x</sub>・PM）対策、②地球温暖化の進行等地球環境問題、③水循環の変化による水環境の悪化、④廃棄物の排出量の増大と不適正処理、⑤身近な自然の減少（生物多様性の危機、生態系の破壊）、⑥ヒートアイランドの拡がり などがある。エネルギーの浪費が地球温暖化、大気汚染、水環境の悪化につながり、廃棄物が自然を破壊している。大量生産大量消費が発達しているから、生態系に影響を及ぼし、不法投棄が起きる。

大昔、恐竜時代には 1000 年に 1 種、現在は 13～14 分に 1 種類の生物が絶滅している。地球温暖化を放っておくと生態系に大きな影響がある。保全することは生活に直結している。

COP10 をなぜこの地域で開こうとしたのか。愛知県は環境に対する取り組みが高い地域だからである。皆さんに環境、自然をもう一度考えていただきたい。COP10 は難しいと思わず、身近な問題が生物に大きな影響を与えていると考える機会になればいいと思う。

#### 木村：

周りでやらなければいけないことはたくさんある。これに気付かされつつある。生物多様性条約、温暖化防止条約、この 2 つの条約は双子のようなものであり、片方がうまくいかなければもう片方もうまくいかない。

人間は地球のいろいろな環境の中に進出して、そこで環境にうまく適した生活を選びとってきた。近代化はそれを一元的な文化、一元的な近代化によってそれぞれの環境の中でふさわしい生活を選ぶことから遠ざかっているような気がする。そのことがいろいろな所で悪影響を及ぼしている。都市問題が飛び火して熱帯雨林、発展途上国の貧困問題を引き起こすのではないか。

#### マリ氏：

普段の生活の中で原点がわからず生活している事が多い。里山は自分たちの環境の中で持続可能な生活をさせてくれていた。それは、日本人だけでなく世界中でしている。現代は考えて暮らす時代、チョイスする時代になったのではないか。選べることが大切であり、選べるからこそ責任をもちながら何を選ぶか考える。

#### 木村：

エコについて、我々はどこから取り組み始めればよいのでしょうか。

**加藤氏：**

知らないところでつながっている。つながりを考え、自分の生活を振り返りライフスタイルを見直す必要がある。

**今村：**

途上国の人々の現状を知る、途上国の人々が先進国の情報を知る、知る事が大切。

**稲垣氏：**

啓発も大切、学習も大切。『やろう』だけではできない。ただ規制を加えるのではなく、社会的経済的システムを変えないと難しい。

**マリ氏：**

アクションが大切。消費者として声を出すこと。一市民としてもっと自分の力があると認識すべきである。自分が地球を変えることができる。

**木村：**

本日のシンポジウムでは環境問題に対し、私たち市民はどのように行動すればよいのか。また、どのように地球を支えていけばよいのか。ということに焦点をあて、進めてきた。本シンポジウムを通して、"Think Globally, Act Locally" : 『地球規模で考え、地域で行動すること』の重要性を確認することができた。